慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古版経済書解題 一千六百七十四年版 リチャード・ヘインズ著 防貧論
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.1 (1937. 1) ,p.139- 146
JaLC DOI	10.14991/001.19370101-0139
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370101-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

zur Religionssoziologie, Bd. 1., 1921; A. Ruhl, Vom Wirtschaftsgeist in Amerika, 1927.)、アメリカの排他主義は其の經濟的自足性にもとづくものであるといふ意見、曰く、セリグマンの史觀（E. R. A. Seligman, Essays in Economic, 1924; L'interprétation economique de l'Histoire, 1921.)、曰く、コムモンズの史觀（J. R. Commons, Legal Foundation of Capitalism, 1924）等々を擧げれば殆んど際限がない。

特定の國家・特定の民族の歷史的固有性探索の學問的意味は、それに依つて現在の制度及び政策の本體を明かにし、それが將來如何なる運命を辿り、かくの如き運命が外部に如何なる影響をもつかを詳かにするにあると考へる。今まで上に擧げた如き諸々の意見をアメリカの具體的制度及び政策に當て嵌めて、さて如何ほどの眞實性あるやを吟味して觀ると、遺憾ながら私は其等の何れにも信賴し能はないのである。乃ち年來學び得たところの結果の要領を綴つて學者の研究に供した次第である。私見を要約すれば、アメリカ的制度（American System）、アメリカ的政策（American Policy）、而して諸々のアメリカ的學說（American School）等々は、アメリカ聯邦の國家形成の手續と其の樣式及びこれにもとづく國民の國家觀に依るものであるといふに歸する。學者の高敎を切望して已まぬ。

（完）

古版經濟書解題

一千六百七十四年版リチャード・ヘインズ著『防貧論』

高橋誠一郎

吾人は曩きに、重商主義時代の英國に在つて、救貧問題が主として貿易差額の見地より考察せられたるを觀、第十七世紀後半期に於ける幾多の論者が、一定部門の工業に貧民を使傭し、國產の奬勵によつて輸出額を大ならしめ、輸入を抑制して、國富の增加を圖らんことを提言せる旨を述べ、而して其の一例としてサッセックスの紳士リチャード・ヘインズ（Richard Haines）の諸著に就いて說く所があつた。（昭和七年版拙著『重商主義經濟學說研究』七〇四—七頁參照）。而も吾人は當時、恐らくはヘインズの第一著と認めらるる可き一千六百七十四年の『防貧論』（The Prevention of Poverty: or, A Discourse of the Causes of the Decay of Trade, Fall of Lands, and Want of Money throughout the Nation; with certain Expedients for remedying the same, and bringing this Kingdom to an eminent degree of Riches and Prosperity: by saving many Hundred Thousand Pounds yearly, raising a full Trade, and constant Imployment for all sorts of People, and increasing His Majesties Revenue, by a Method no way burthensome, but advantagious to the Subject.）を擧示することがなかつた。吾人は最近此の書を購入し

得たるを機として、聊か茲に之れが解說を試んとする。

本書は單にアール・エーチの頭字を署するに過ぎないが、一般にリチャード・ヘインズの著と看做されてゐる。ヘインズの生涯は全く不明である。ボーウェル氏(Eleanor G. Powell)の如きも、唯だ一千六百七十八年に出版せられた Philo-Anglicus と名乘る匿名氏の著 Bread for the Poor. に據つて、彼れがサッセックスの鄕紳であつたと稱せられることゝ(ibid., p. 4.)、彼れが其の意見に於て明かに勤王主義者であり、又其の一千六百八十一年の著 England's Weal and Prosperity proposed. の末に於て恰も彼れが國會議員たりしが如き口吻を漏しつゝあるも、而も彼れの名は ロベット (Cobbett) の Parliamentary History. に於ける名簿中に現るゝことなき旨を記するに止まる。(Dictionary of Political Economy, ed. by Sir Robert Harry Inglis Palgrave, vol. II, 1910, p. 272.)。

ヘインズは本書の外、同年、New Lords, New Laws, or a discovery of a grand usurpation. 一千六百七十七年 Proposals for building in every County, a Working-Alms-House or Hospital; as the Best Expedient to perfect the Trade and Manufactory of Linen-Cloth. (一千八百十年 The Harleian Miscellany. 第三卷中に挿入せらる)、一千六百七十八年 Provision for the Poor. 及び A Model of Government for the Good of the Poor and the Wealth of the Nation, with such a Method and Inspection, that Frauds, Corruption in Officers, Abuses to the Poor, ill Administration of Materials, &c. therein, may be prevented; the stock rais'd and preserved; all poor people and their children for ever comfortably provided for; all idle hands employed; all oppressed parishes eased; all beggars and vagabonds for the future restrained; poor prisoners for debts relieved, and malefactors reclaimed, to their own comfort, God's glory, and Kingdoms's wealth and honour. 一千六百七十九年 A Method

THE

PREVENTION OF POVERTY:

OR,

A Discourse of the *Causes* of the *Decay of Trade*, *Fall of Lands*, and *Want of Money* throughout the Nation; with certain *Expedients* for remedying the same, and bringing this Kingdom to an eminent degree of Riches and Prosperity:

BY

Saving many Hundred Thousand Pounds yearly, Raising a full Trade, and constant Imployment for all sorts of People, and increasing His MAJESTIES *Revenue*, by a Method no way burthensome, but advantagious to the Subject.

By *R. H.*

The Rich mans wealth is his strong City, the destruction of the Poor is their poverty. Prov. 10. 15.

LONDON,
Printed for *Nathaniel Brooke*, at the sign of the Angel in *Cornhill* near the *Royal-Exchange*, M. DC. LXXIV.

of the Government for such Public Working-Alms-Houses as may be erected in every County for bringing all Idle Hands to Industry. 一千六百八十一年 England's Weal and Prosperity proposed. を公にしてゐる。

『防貧論』は其の表題頁に『箴言』第十章第十五節「富める者の資財は其の堅き城なり、貧しき者の乏しきは其の亡びなり」の語を掲げ、樞密顧問官ルーパート公爵(Prince Rupert)に献げられてゐる。パレスタイン選擧侯フリートリッヒ五世と英王ジェームズ一世の女エリザベスの間に三男として生れ、屢々戰場に武名を馳せ、國事に鞅掌せるルーパート公は又、化學的、物理的及び技術的研究に從事し、メゾォチント凹版の技術を改良し、彼れの名によつて知らるゝ爆發ガラス玉(Prince Rupert's drops)及び銅と亞鉛又は砒素の合金と看做さるゝ「王金」(Prince Rupert's metal 若しくは prince's metal.)を發明した。(此の合金は我が國では「王金」と譯せられてゐるが、須らく「公金」と稱せらる可きものであらう)。即ちヘインズの言葉を以つてすれば、彼れは啻だに最も卓越せる行動並びに命を的とせる戰鬪によつてのみならず、常に英國民の福祉を增進せんことを企圖せる其の愼重なる意見により、有用なる諸技術及び有利なる諸工夫を發見し育成するにより、又英國民の光榮と富と繁榮とに資する總べての物を奬勵するによつて、之れが安全と偉大とに對する其の强大なる熱意の無比の證跡を示したのである。是に於いて乎、ヘインズは王國將來の幸福に資する若干の方策を提唱せんことを企圖せる其の小著を彼れの足下に捧呈したのである。(The Prevention of Poverty, 1674, The Epistle Dedicatory.)。

ヘインズは先づ武裝せる敵の如く全王國を侵略するの虞れある國民的貧困の諸原因を看出し、次いで、能ふ可くんば、啻だに此の强大なる敵を征服するのみならず、併せて交易の不斷の資財及び貨幣の夥多、斯くて延いては又、國王及び王國に對しては共に富と名譽、而して遍く總べての階級に對しては繁榮を誘導し維持す可き救濟策を發見するに努める。彼れの觀る所を以つてすれば、貧困の一般的原因は第一には、輸出に適する自國產の財貨が日毎に減少しつゝあることであり、第二には海外より愈々多く齎さるゝ外國の高價なる財貨が急速に增加しつゝあることである。(ibid., p. 2.)。斯くて又、彼れは這般の漸次增加しつゝある禍害を防止する最良の手段を以つて、第一には英國自身の產物より生じ、又生ずるを得るものを改良し、是れに由つて自國の土地が穀物及び家畜の其れ以外に或る他の方法に使用せらるゝを得可き新製品を產出し、而して第二に、新たなる輸入財、特に王國の福祉に取り無用であり有害である底のものに對して輸入の門戶を鎖すに存しなければならぬと考へた。(ibid., p. 4.)。

而して彼れは自國產物より製造せられ、而して總べての階級の人々の一般的幸福及び利益に取つて最も有利なる可き製造品であつて、其の輸入を禁止せらる可き第一のものを亞麻布(リンネル)と觀る。即ちそは第一に、大麻及び亞麻に適する土地を改良して、糞きに穀物及び牧草地として一ケ年一エーカーに就き二十志を値するに過ぎざりしものを、是れに由つて四十若しくは五十志を値するに至らしむ可きである。第二に、貧困なる家族の夥しき數は是れに由つて最も有利に絕えず仕事に從事せしめらるゝを得可きである。第三に、是れに由つて貧困なるが爲めに製造所を設立して毛織物製造に其の貧民を從事せしむることを能はざる各教區は容易に彼れ等を亞麻布製造に從事せしむるを得可きである。第四に、戶毎に物を乞ふて、國民に大なる不名譽と不利益とを與へつゝある數千の浮浪の徒は是れに由つて國民を富裕ならしむるの用具と爲るを得可きである。最後に、是れ等の諸利益の外、現今亞麻布に對して費され、國外に送致せらるゝ數十萬磅は是れに由つて國內に保留せらるゝを得るのみならず、そは又、帆、大綱及び其の他の索具の如き航海に取つて必要なる貨物を隣邦に俟つの要なからしむるの利益ある可きである。(ibid., pp. 5-7.)。而して著者は又、最良地の大部分を使用する這箇大麻及び亞麻の栽培が穀物及び家畜を減少せしむ可しと做

すの憂懼を以つて根據なきものと考へた。(ibid., p. 7.)。

而して著者に從へば、輸入を禁止せらる可き第二のものはブランデーと稱せらるゝ殺人的飲料であり、第三のものは天日鹽（Bay-Salt）であり、第四のものは硝石であり、第五のものは鐵である。(ibid., pp. 7-8.)。而して、彼れは、鐵及び亞麻布は共に吾人が國内に於いて是れ等のものを製造し得るよりも低廉に海外より購入せらるゝを得可く、而して總べての貨物が最も低廉に取得せられ得る所に於いて是れ等のものを購入するは最良の經濟であることは疑ひもなき所であると做す自由貿易論的反對意見に對して、縱令ひ此の國の住民は尙ほ國内に於いて製造せらるゝものを購入するよりも現在に於いては海外よりして一層低廉に是れ等の貨物を取得し得るとするも、而も吾人にして若し孜々として之れに盡瘁す可しとしたならば、事情は暫時の間に變化す可きであると答へる。加之、彼れは海外より來るものに對して僅かに十五磅を支拂ふに過ぎざるよりは自國産の其れに對して二十磅を與ふることが遙かに良く經濟の道に適するものであると思惟する。又彼れは總べて是れ等の貨物に對して支拂ふは貨幣に非ずして財貨であり、是れに由つて吾人は其の手離さゞるを得ざる所のものに對してより有利なる貿易を有するのである。然るに若し這般の貿易にして失はるゝとしたならば、吾人が手離さゞるを得ざる吾人自身の財貨は殆んど何等の價値をも有せざる可く、斯くて又、吾人の狀態は現在よりも遙かに不良と爲ると做すの反對論に對しては、四五十年以前に於いては何等の貨幣をも引渡すことなくして、貨物は更らに大なる價値の貨物を取得するが爲めに赴き、斯くて當時に於いては固と英吉利に於いて生産せらるゝことのない銀及び金の兩者は甚だ豐富であつたと答へる。而して吾人の輸出貨物にして輸入せらるゝ貨物の增加に相應して增加することがなかつたならば、必然貨幣は出で行き、貧困は入り來らなければならぬ。(ibid., pp. 11-12.)。

ヘインズは、輸入を禁止せらる可き是れ等の諸貨物に、必然更らに大なる罰金を以つて輸出せらるゝことを禁止せらる可き諸貨物が加へらるゝを得可きものと認める。斯くの如きものは晒布土若しくは縮絨土（fuller's earth）及び羊毛である。一は極めて效用あるものであり、他は此の王國の頗る豐富なる貨物であつて、そは織物に變ぜしめらるゝが爲めに我が人民の多數に職を與へ、多くの富を國家に齎す可きものである。(ibid. p. 13.)。彼れは又、麥酒、エール等の如き優良なる飲料に富む自國の製造所を奬勵するが爲めに、佛國産酒類の法外なる輸入に對して一定の制限を加ふるの便宜を認める。(ibid., p. 13-14.)。

彼れは又、亞麻布、鐵、ブランデー、鹽等が全然輸入を禁止せらる可しとしたならば、關稅より生じつゝある陛下の收入は著しく減損せらる可しと做す財政的見地よりする反對論に答へる。前述せるが如き方法に依つて、「貨物に對する貨物」の不易確實なる貿易の法則が確立せらるゝが故に、陛下の收入は向後更らに堅固なる基礎の上に立つを得可く、而して輸出に適する自國貨物は是れに由つて增加せらるゝが故に、他の貨物、而して更らに高貴なる性質の其れ、並びに國内に於ける吾人の勤勉が吾人に供給すること能はざる底のものに於いて從前よりも更らに大なる報酬を國内に齎すこと疑ひなかる可きである。又、斯くの如き禁止は全國民の大利益に資するが故に、又陛下は其の人民に對する慈愛心より其の收入の斯くの如き部分を放棄す可きが故に、彼れの臣民は啻だに義務としてのみならず、謝恩としても亦、陛下の御用を辨ぜざるを得ないであらう、而して彼れ等の代表者の智慧は稅金、賦課金若しくは之れに類するものによつて斯くの如き陛下の損失を補償す可き或る他の方法を看出すを得可きである、總べての人民は這般の手段によつてのみ敏活なる職務と貨幣の夥多とを享有し得るが故に、そは今や大なる利益を以つて、又更らに容易に且つ欣然と負擔せられ支拂はるゝを得可きである。(ibid., pp. 14-15.)。而して著者は又著

しく陛下の費用に資するを得ると共に、充分なる貨幣を調達し保持するの手段たるを得可く、併せて全國民の富と繁榮とに資すること大なる可き方策として貨幣切下げを主張する。（ibid., pp. 15 ff.）。

洵にヘインズに在つては、其の防貧の社會政策的見地は財政的見地及び產業政策的見地と相容れ相一致するものであつた。

ロバーツ著「ボアギュベール」

——Hazel Van Dyke Roberts, Boisguilbert, economist of the reign of Louis XIV, 1935.——

下田博

一

其の提唱せる論策が濟世の熱情に燃えたる文字を以て書き綴られて居るにも拘らず、社會經濟的環境の未成熟の故に、却て其れが世道人心を惑はし、世の統制規律を紊すものとして斥けられ、罰せられ、遂に不遇の裡に世を終れる先驅的思想家の例は之を史上に見ること頗る多い。今茲に紹介せんとする著書の主人公ピェール・ル・ペサン・シュール・ヅ・ボアギュベール（Pierre le Pesant, sieur de Boisguillebert）の如きも亦、佛蘭西自由主義經濟思想成立期に於ける一人の不幸なる殉教者であつた。彼の存在は、所謂曲學阿世の徒にして、其の阿諛追從的言說の故に、世に迎へられ、多幸なる生涯を送れる當時のサロン學者と正に好箇の對照をなすものである。一六四六年二月十七日を以てルウアン（Rouen）に生れ、一七一四年十月十日同地に於いて歿するまで、其の七十餘年の長き生涯を通じて、殆ど寧日すらなく、一にアンシャン・レジイム（Ancien régime）及びコルベールチスム（Colbertisme）に對する完膚なき批判と其の缺陷及び惡弊に對する痛烈なる駁擊とを敢てし、而して祖國佛蘭西の爲に其の眞に進む可き途を重

ロバーツ著「ボアギュベール」